



幻夢の女（ひと）



b-svaha

男は、夢の中の白い砂の浜で、女を愛していた。

小麦色の肌に、長い黒髪の女は、裸で男のそばに横たわっていた。

女の顔は、どこかで一度、確かに恋に落ちたことのある、

男にとっては、理想的なものだった。

女は、男の愛撫に安らぐ、無垢な人魚のようだった。

(僕は、このひとでよかったのだ...)

亜麻色の髪をなで、黒長のまつ毛に優しくキスをしながら、

男はそう思っていた。

同時に、その理想的な女の容姿のどこかに、

万分の一ほどの違和感があることも、男は知っていた。

「このひとも、しょせんはあの人とは違うのだ...」

お前が求めているのは、

この女でもない、ほかのどの女でもない、

あの女(ひと)だけなのだ...

お前は、自分を偽っているだけなのだ...」

ささやく声が聞こえてきた。

そのかすかな違和感は、

男の何万生にも渡る幾転生を貫いて、

癒されることのない深い傷として心に生き続けていた。

夢から覚めた男は、

遠い過去世で生き別れとなった、

忘れられないあのひとへの思慕を、

真実の愛に違いないと信じていたが、

夢で亜麻色の髪の女を愛することもできてしまう自分が、

わからなくなっていた。

(なぜ夢は、あの人を出してはくれないのだろう…)

もしあの人を出してくれたら、

僕はもう、その夢の中から決して戻らないつもりなのに…)

それから一年が過ぎたころ、

男はあの女(ひと)の夢を見た。

まぎれもなく、

幾万年も前に感じていたあの人髪、

手の温もり、波動だった。

「やっと、きみに逢えたんだね」

男は、そうやって手を差し伸べた。

そのひとは、優しく彼の手をとると、

白くて高い、きらきらした橋に向って、

二人してゆっくりと歩き出した。

夢から覚めなかった男は、

微笑んだまま冷たくなった体を、

五月にしては冷やかな

朝露に濡れた新緑の上に、

静かにそっと横たえていた。